平成一三年三月一日発行（毎月一日一回発行）

經濟論叢

第167巻　第3号

渡邊 尚教授記念號

献　辞……本山美彦
大戦間期ドイツ電機工業における
流れ作業の導入と展開……今久保幸生　1
両大戦間期ドイツにおける
工作機械工業の地域構造……幸田亮一　23
救貧法から相互扶助へ……廣重準四郎　43
日本の工作機械メーカーにおける
製品開発システム……小林正人　60
北タイにおける在来織物業の発展と
その生産形態について……上田曜子　89
中小企業の変質とその競争力……蘇顯揚　108
スコットランドの綿工業の発展過程……林妙音　130
貧困削減政策の実効性に関する一考察……大平剛　146
渡邊　尚 教授 略歴・著作目録

平成13年3月

京都大學經濟學會

経済論叢（京都大学）第167巻第3号，2001年3月

スコットランドの綿工業の発展過程

——「スコットランド産業革命」と「スコットランド原経済圏」について——

林　　妙　音

I　視角と課題

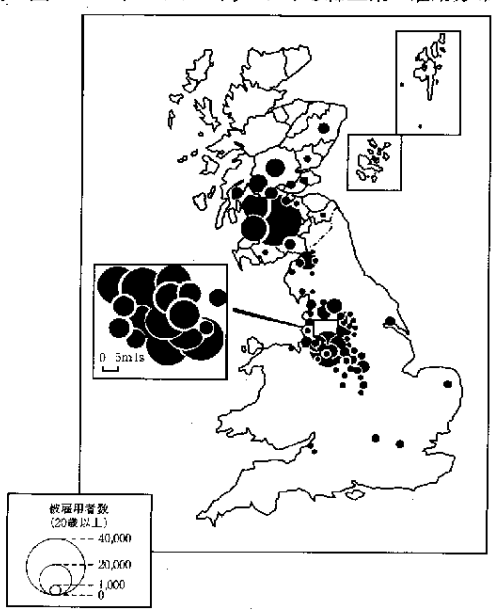
産業革命[1]を資本制社会が成立するに必要な歴史段階，かつ自立した経済地域——「原経済圏」の形成過程[2]として把えるならば，産業革命のあり方がそれによって形成してくる資本制社会に特徴的な性格を与えるだけでなく，近代国家という政治・経済空間の構成に決定的意味を持つものでもある。

18世紀末に綿製品の機械生産の始まりをもってイギリスでは世界最初の産業革命が勃興した。機械化の動きがその後他の産業分野へ波及していき，綿工業と製鉄業を主役とする産業革命が19世紀後半まで全面的に進行していった。このような産業革命の主役産業の一つである綿工業の産地分布に関しては，P. ラクストンがまとめた，1861年におけるイギリス繊維工業の雇用分布図第1図は興味深い事実を示している。即ち，従来綿製品生産の中心地と見なされてきたイングランドのランカシャー地域のほかに，スコットランドにあるグラスゴウ地域も大規模な綿生産活動を行っていたことである。また，P. ライデンが作成した第2図から，産業革命の進行に大きな意味を持つ製鉄業もスコットラ

1)「産業革命」という概念解釈，研究視点の変遷に関しては，下記の諸参考文献を参照されたい。永田正臣『イギリス産業革命の研究』ミネルヴァ書房，1973年，1-92ページ，社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望—社会経済史学会創立40周年記念』有斐閣，1976年，55-64ページ，熊岡洋一『近代イギリス毛織物工業史論』ミネルヴァ書房，1993年，2-44ページ。

2) 渡邊尚「ラインの産業革命」東洋経済新報社，1987年，13ページ，渡邊尚『現代ヨーロッパ経営史——「地域」の視点から』有斐閣，1996年，37-40ページ。

第1図　1861年ブリテン島における綿工業の雇用分布図



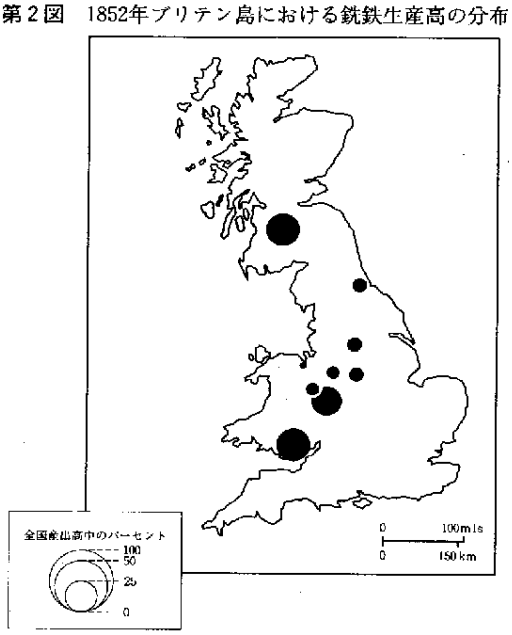
出所：ラングトン・モリス，米川伸一・原剛訳『イギリス産業革命地図』原書房，1989年，111,129ページ。

ンドで大規模な生産活動を展開していたことが窺われる。これらのことはイングランドと同じようにスコットランドでも綿工業や製鉄業の発展を中心とする産業革命が進行していたことを示唆している[3]。

このようなスコットランドで進行していた産業革命の実態を解明する初歩作業として，本稿は産業革命の勃興に最も重要な意味を持つ綿工業に焦点を当てる。スコットランドの綿工業の発展過程を概観し，スコットランド綿工業の特

3)　H. Hamilton, *The Industrial Revolution in Scotland*, London, Frank Cass, 1966, pp. 1, 3-6. 最初に「産業革命」という概念をスコットランド経済史研究に援用したのはH. ハミルトンである。ハミルトンによると18世紀後半から19世紀後半までの期間にスコットランドで進行していた産業革命は主に次の二つの段階がある。即ち，1780年代から1830年代までは綿工業，そして1830年代から1880年代までは金属工業がそれぞれ基幹産業としてスコットランド産業革命の進行を後押ししていたことである。

第2図 1852年ブリテン島における銑鉄生産高の分布



出所：ラングトン・モリス，米川伸一・原剛訳『イギリス産業革命地図』原書房，1989年，111,129ページ。

徴とその歴史的役割を確認しながら，「スコットランド産業革命」ならびに「スコットランド原経済圏」という概念構築を試みることが本稿の課題である。

II スコットランドの綿工業の発展過程

1 発展傾向（1770年代から1860年代まで）

スコットランド綿工業の勃興は18世紀初頭から発展してきた亜麻工業に負うところが大きかった。キャンブリック Cambric，ローン lawn，ガーゼ gauze といった良質亜麻織物の産地として長い間亜麻生産に携わってきたグラスゴウやペイズリィ Glasgow-paisley 地方では高度な熟練した織布技術が蓄積され[4]，

4) A. J. Warden, *The Linen Trade*, London, Frank Cass and Co.Ltd., 1864, pp. 504-505, 527. ↗

優れた織布技術を基盤にスコットランド西部は1770年代の初頭から純綿布の生産を始めた[5]。一方，ほぼ同じ地域でベンガル bengal やブランク blunk と呼ばれていた亜麻と綿の混織物の生産[6]がかなり大きな規模で行われていたことも無視できない意味を持っている[7]。この種の混織物生産の展開によって多くの生産業者は綿花という新しい繊維原料に関して豊富な加工経験を持つことになった。このことは綿製品生産がその後スコットランドで急速に展開していくことの一因にもなったのである。

また，アメリカ独立戦争によってグラスゴウを拠点とするアメリカ植民地貿易が一時期頓挫したことも，スコットランド綿工業の勃興に促進的な役割を果たした。それまで植民地貿易で運用されてきた資金の少なからぬ部分が域内の製造業に流入し，綿製品生産がその対象の一つであった[8]。このように生産環境や，資金条件等，いずれも綿製品生産の展開にとって有利な環境が整える素地となり，綿工業が1770年代からスコットランドで本格的にその発展の段階をふみ出した。

良質綿製品の生産を中心にスコットランドの綿工業が着実にその成長を進めていった[9]。水力紡績工場が次々と建設され，モスリンなどの良質綿布の生産高が年々伸びていった。19世紀初頭までには綿布の生産規模の拡大に追いつく

A. J. Durie, *The Scottish Linen Industry in the Eighteenth Century*, Edinburgh, John Donald Publishers Ltd., 1979, pp. 27, 66-67.

5) A. P. Wadsworth & Julia De Lacy Mann, *The Cotton Trade and Industrial Lancashire 1600-1780*, Manchester, Manchester University Press, 1931, p. 176. I. D.Whyte, "Proto-industrialisation in Scotland" in *Regions And Industries: A perspective on the industrial revolution in Britain*, ed. by P. Hudson, Cambridge University Press, 1989.

6) G. M. Mitchell, "The English and Scottish Cotton Industries: A Study in interre lations," *Scottish Historical Review*, Vol. 22, 1925, p.104. アレックス・J・ロバートスン，武居良明訳「スコットランド綿工業の興隆 … 1770年－1840年」『法経研究』静岡大学，36-4，1985年，78ページ。村山高『世界綿業発展史』青泉社，1961年，32，35ページ。

7) 村山，前掲書，41ページ。A. J. Durie, *op. cit.*, p.67.

8) T. M. Devine, *The Tobacco Lords: A Study of the Tobacco Merchants of Glasgow and their Trading Activities c.1740-1790*, Edinburgh, Edinburgh University Press, 1975, pp. 43-46.

9) W. H. Marwick, "The cotton Industry and the Industrial Revolution in Scotland," *Scottish Historical Review*, Vol. 21, 1924, p. 211. Hamilton, *op. cit.*, p. 143.

ことができず，綿糸，特に良質綿糸の供給の大部分はマンチェスターの綿紡績業者に仰いでいたが，自動ミュール power mule が普及していくにつれ[10]，綿糸の外部依存が徐々に解消されるようになった。全体として，織布生産と紡績生産との持続的拡大に支えられ，スコットランド綿工業の成長が19世紀の中頃まで続いた[11]。

ところで，1830年代にスコットランド綿工業の成長を妨げる要因が次々と現れてきた。まず欧州大陸の良質綿製品との競争が激しくなり，いままでのスコットランドの成長を支えてきた良質綿製品の販路が次第に縮小した。そして，新しく台頭してきた大衆向け綿製品の生産も，強豪のイングランドの綿工業との競争に直面し，大きな進展が見られないまま，苦境に立たされていた[12]。そうした状況に加え，この時期に域内の製鉄，機械製造などの重工業分野の利益率が高まってきたため，資金や労働力が次第にそれらの産業分野に移っていたために，綿生産業者にとって資金や安価な労働力の調達が一層困難になった[13]。1840年代にはこの一連の不利な要因が依然として解消できず，綿製品の生産高は一層不安定になり，綿工業の立地が縮小しはじめた。不運にも1857年に金融恐慌が起き，その余波を受け多くの企業が倒産し，資金力のある企業も次々と製鉄業や機械製造業へ転業するようになった[14]。1860年代中頃の綿花飢饉でさらに多くの中小事業体が淘汰され，生産高の変動が一層激しくなった[15]。1870

10) G. M. Mitchell, *op. cit.*, p. 107. S. D. チャップマン，佐村明知訳『産業革命の中の綿工業』晃洋書房，1990年，24，86ページ。自動ミュールが普及する前に，高番手の良質綿糸の製造はほとんど高度な熟練手工技術に依存していた。なお，スコットランドでは自動ミュールの普及は1830年代以後に待たなければならなかった。

11) ロバートスン，前掲論文，77ページ。

12) Hamilton, *op. cit.*, p. 148. ロバートスン，前掲論文，82ページ。W. W. Knox, *Hanging by a Thread: The Scottish Cotton Industry c. 1850-1914*, Preston, Carnegie Publishing Ltd., 1995, p. 5.

13) Hamilton, *op. cit.*, p. 149. Knox, *op. cit.*, p. 2.

14) ロバートスン，前掲論文，80ページ。Marwick, *op. cit.*, p. 218. W. H. Fraser, "The Glasgow Cotton Spinners, 1837" in *Scottish Themes: Essays in honour of Professor S. G. E. Lythe*, eds. by J. Butt & J. T. Ward, Scottish Academic Press, 1976.

15) D. Bremner, *The Industries of Scotland: Their Rise, Progess and Present Condition*, New York, Augustus M. Kelley, Publishers, 1969, pp. 286-288. A. J. Robertson, "The Decline of↗

年代中葉になると紡錘数であれ，力織機の稼動数であれ，いずれも減少傾向に転じ，綿製品生産が多くの地域から姿を消した。縫い糸 thread の生産だけ，グラスゴウやペイズリィなどの南西地域で20世紀初頭まで行われていたのである[16]。

2 資　本

スコットランドで綿製品生産に必要な資本を提供した者の出自は概ね次の四つがある。第一に地主階級の綿製品生産への資本参加が多く見られる。資金援助はともかくとして，工場の建設に必要な敷地・建物や水車施設の提供に関して地元の地主階級は特に積極的な協力姿勢を示した[17]。第二にグラスゴウ商人たちが果たした役割に注目に値する。前述したように，アメリカ独立戦争によって資金の運用先を失ったグラスゴウのタバコ貿易商人たちが新しい投資先として綿工業に資金を投じた例が少なくなかった[18]。ところで，原綿の輸入や市場の開拓に関しては，タバコ貿易商人以上に綿工業の勃興に大きな影響を与えたのは砂糖貿易商人たちであった。彼らは西インド諸島から砂糖や原綿を輸入してきただけではなく，砂糖やラム酒などの輸入品の対価として域内で生産した綿製品の一部を西インド諸島へ輸出したこともあったからである[19]。第三に，綿工業の発展に最も大きな貢献をなしたのは従来の亜麻と羊毛関係業者である。生産技術，市場情報などのような無形な資本のほか，亜麻製品の生産や

---

the Scottish Cotton Indusry,1860-1914," *Business History*, Vol. 12, 1970, pp. 116-128. Knox, *op. cit.*, pp. 5-6.

16) D. A. Farnie, *The English Cotton Industry and the World Market 1815-1896*, Clarendon Press, Oxford, 1979, pp. 73, 188. Knox, *op. cit.*, pp. 5-6.

17) J. Butt & Kenneth Ponting (eds.), *Scottish Textile History*, Aberdeen University Press, 1987, pp. 31-32.

18) Mitchell, *op. cit.*, pp. 101-102. Devine, *op. cit.*, pp. 43-46. 川北稔『工業化の歴史的前提——帝国とジェントルマン——』岩波書店，1983年，232-233ページ。

19) T. M. Devine, *op. cit.*, p. 44. 川北，前掲書，184ページ。J. Butt, "The Scottish Cotton Industry during the Industrial Revolution, 1780-1840" in *Comparative Aspects of Scottish and Irish Economic and Social History 1600-1900*, eds. by L. M. Cullen & T. C. Smout, John Donald Publishers Ltd., 1977, pp. 116, 118. ロバートスン，前掲論文，81ページ。

その原材料・製品の取引で蓄えてきた資金をそのまま綿製品生産に援用した事例が数多く存在していた[20]。第四にスコットランド綿工業の勃興に無視できない役割を果たしたのはイングランドからやってきた綿糸商人や綿布製造業者たちであった。マンチェスターで生産した良質綿糸をスコットランドまで運んできて，それをグラスゴウ周辺の織工へ配分して，彼らに良質綿織物を作らせていた。このようなイングランド人綿糸商人の活躍ぶりは特に顕著であった[21]。また，スコットランドでの旺盛な良質綿糸の需要を見込んで，自らスコットランドで新式の紡績工場を建設したり，綿糸生産へ資本参加したりするイングランド人も数多く存在していたように，スコットランド綿工業の発展にはイングランド資本が欠かせない役割を果たした[22]。

3 生産構造

①紡績工程

1779年にイングランド人によってスコットランドで最初の水力紡績工場がアイガイル州 Argyllshire の Rothesay で建設された[23]。水力紡績工場がその後グラスゴウを中心とする西部地域で次々と設けられ，1787年には19工場，1834年には125工場が稼動していることが示すように，紡績工程の生産規模が年々増大していた[24]。一方，ジェニー紡績機や手動ミュールを使って横糸や良質綿糸を作る小規模な製造場の建設が水力紡績工場のそれより早い速度でスコットランド各地で展開していた[25]。水力紡績工場の地域的集中とは対照的に，19世

20) Marwick, *op. cit.*, pp. 210-211. Hamilton, *op. cit.*, pp. 124-126. I. Donnachie & G. Hewitt, *Historic New Lanark: The Dale and Owen Industrial Community since 1785*, Edinburgh University Press, 1993, pp. 17-34.

21) Mitchell, *op. cit.*, p. 103. Hamilton, *op. cit.*, p. 127.

22) Bremner, *op. cit.*, p. 279. Butt, *op. cit.*, pp. 119-120. 北政巳『近代スコットランド社会経済史研究』同文舘，1985年，86ページ。Donnachie & Hewitt, *op. cit.*, pp. 59-84.

23) Mitchell, *op. cit.*, p. 104. Bremner, *op. cit.*, p. 279.

24) S. J. Chapman, *The Lancashire Cotton Industry: A Study in Economic Development*, Mancherter, 1904, p. 149. Donnachie & Hewitt, *op. cit.*, pp. 59-111. 剣持一巳『イギリス産業革命史の旅』日本評論社，217-236ページ。

25) Hamilton, *op. cit.*, p. 129.

紀の初頭には，このような小規模なジェニーやミュール紡績場は，ほぼロウランド全域，さらにはハイランドの一部の地域まで広がっていた[26]。全体として，水力紡績工場による縦糸の生産とジェニーやミュール紡績場による横糸や良質綿糸の生産が相互に補完しながら，綿糸生産は19世紀の中葉まで工場制経営，マニュファクチャー経営，そして問屋制経営という三つの経営形態の下でスコットランド全域で行われていたのである[27]。

紡績工程における動力の応用に関しては，比較的に水源が豊富なスコットランド西部では，水力が綿工業生産にとって欠かせない重要な動力源であった。特に充分な水源が通年確保できる西部の一部地域では，綿工業の発展にとって水力が蒸気力以上の役割を果たしたといえよう。水力に恵まれているこの環境を利用するに当たって，水力を動力とするミュールの改良は早くも1790年にスコットランド人の W. ケリィ William Kelly によって行われ，部分的な成功を収めた[28]。1825年に自動ミュール self-actor mule を完成し，それを実用化させたのはイングランド人の R. ロバーツ Richard Roberts であったが，W. ケリーのように長い間ミュールの改良・操作に携わってきた一群の熟練工の存在を背景に自動ミュールは，その後スコットランドでも急速に普及していった[29]。一方，ミュールの生産能力の増強に刺激され，水力紡績機自体も様々な改良が施されるようになった[30]。スロッスル・フレーム throstle frame と呼ばれる水力紡績機の改良版はその生産能力が大いに向上しただけではなく，従来の水力設備をそのまま利用できることもあり，後にミュールとともにスコットランドで最も普及していた紡績機となった[31]。

水力の他，もう一つ産業革命を推し進める重要な動力源は蒸気力であった。スコットランドではワットが発明した蒸気機関を紡績工程に導入しようとする

26)　ロバートスン，前掲論文，79-80ページ。
27)　Hamilton, *op. cit.*, p. 130.
28)　村山，前掲書，122ページ。
29)　Hamilton, *op. cit.*, p. 131.
30)　村山，前掲書，136ページ。
31)　Butt, *op. cit.*, p. 122.

最初の試行は1792年に行われた。しかし，蒸気力の応用がその後において緩慢な進歩しか示しておらず，1830年代までは主な動力源が依然として水力であった[32]。蒸気力がスコットランドで繊維生産などの多くの産業分野で主要な動力源として応用されるようになったのは1830年代後半以後のことであった。この時期になってようやくスコットランドでの蒸気機関 engine やそれを応用した紡績機械の生産技術と生産体制が整備され[33]，また石炭生産も飛躍的な進展を遂げたなど，蒸気力の普及に必要不可欠な諸条件が成熟したからである[34]。

②織布工程

亜麻工業時代に培ってきた熟練した織布技術を基盤に，スコットランドの綿布生産は1760年代の発展の当初からモスリンなどの良質綿製品志向を示した[35]。1770年代末にミュールが発明され，それによって良質綿糸の大量生産が可能になってから，グラスゴウやペイズリィ以外にも多くの地域が良質綿布の生産に参入するようになった[36]。このような良質綿布の生産に従事する事業体の多くがいままで亜麻布を生産してきたものが多かった。手織工たちを組織し，彼らに亜麻布を作らせてきたマニュファクチャー主が従来と同じ経営手法で仲介人 Carrier を通して手織工たちへ原料を配り彼らに生地を作らせていたが，その原料が亜麻糸から綿糸へ変わったのである[37]。このように問屋制やマニュファクチャー経営で編成されていた従来の亜麻布の生産体制がそのまま綿布生産に継承され，1840年代後半まで織布工程の主要な生産・経営形態としてスコットランドでの綿布生産を支えていたことができる[38]。

1787年に発明された力織機がスコットランドで最初に導入されたのは1793年のことであった[39]。その後200基程度の力織機を装備する工場が設けられたり，

32) Mitchell, *op. cit.*, pp. 107-108.
33) Hamilton, *op. cit.*, pp. 132-134. S. D. チャップマン，前掲書，20ページ。
34) 石坂昭雄・船山栄一・宮野啓二・諸田実『新版 西洋経済史』有斐閣，1987年，166ページ。
35) ロバートスン，前掲論文，82ページ。チャップマン，前掲書，24ページ。
36) Butt, *op. cit.*, p. 117.
37) Mitchell, *op. cit.*, p. 109.
38) Hamilton, *op. cit.*, pp. 138-139. Donnachie & Hewitt, *op. cit.*, p. 7.
39) Marwick, *op. cit.*, p. 213.

機械そのものの動力に蒸気力が導入されたりするような革新的な事業活動が次々と行われた。しかし，商業的採算がとれないため，力織機の迅速な普及が見られず[40]，手織機による良質綿布の生産が依然として主要な生産形態であった。1830年代に力織機にモスリンを製造できるような技術的な改良が加えられてから，ようやくその導入が徐々に広がっていくようになった。しかし，スコットランドでは織布工程における機械の導入とその結果としての工場制経営の進行が依然として緩慢なものであった[41]。それはスコットランドが良質綿布に特化していたため，手作業しかできない高度な織布技術に依存していたことが大きい。また，自分の生計を脅かす力織機の導入に対して手織工たちが自主的に賃銀を引き下げたり，機械を打ち壊したりする様々な阻止運動を起こしたからである[42]。力織機がスコットランドで全面的に導入されるようになったのは1840年代後半以後のことであった。

ところで，このような機械化の進行の立ち遅れが主要な原因になって，スコットランドでは紡績工程より織布工程の方がいち早く危機が訪れた。良質綿布はその市場規模が限られているものであり，ファッションの移り変りにより流行の不意な変化によって販路が急減することもしばしばあった。一方，フランス，スイス，オーストリア等の国はもとよりヨーロッパ諸国では高度な熟練した織布技術をもっているため，それらの国の製品との競争が特に厳しいものであった。1810年代に入ると良質綿布の国際市況がますますスコットランドにとって不利になり，国内市場でさえフランスやスイスから輸入されていた高級綿製品との苦戦が続いた[43]。この苦境を打開するために，一部の生産業者は製品品目を変更し，新しい市場を開拓しようとした。機械生産による大衆向けの綿製品が次々と開発され，高級品から大衆品まで多種多様な綿製品が市場に売

40)　村山，前掲書，128-130ページ。
41)　Hamilton, *op. cit.*, pp. 136.
42)　Mitchell, *op. cit.*, pp. 108-109. Bremner, *op. cit.*, pp. 283-284, 294. Knox, *op. cit.*, pp. 152-158.
43)　Hamilton, *op. cit.*, p. 148.

り出されるようになった[44]。しかし，大衆品市場ではヨーロッパの国々より手強い競争相手がスコットランドのすぐ南の方にあったイングランドである。イングランドは1770年代の綿工業の勃興時点からすでに大衆品路線を打ち出しており，1830年代には世界で最も高い生産性を持ち，従って最も強い競争力を持つ国になっていたのである。この強力な競争相手に対して，スコットランドの綿布生産業者が比較的に低い固定費用と労働費用等々を条件に，ある程度の競争優位を保っていたが[45]，南の大規模な機械化の進行が進むにつれ，その優位が次第に薄れていった。結局，織布工程も紡績工程と同じように精巧を極めた手工技術でしか作られない高級綿布の生産へますます特化し[46]，綿布の機械生産が1870年代から衰退の一途を辿っていった。

4 市場構造

前述したように，良質綿布がスコットランド綿工業の主力製品であった。無地モスリン plain muslin を始め，その加工品であるキャリコ calico, ギンガム ginghams，シルク・ガーゼ silk gauze, ショール shawls 等々の製造加工がグラスゴウとペイズリィ地域に活況を齎しただけでなく，綿工業をスコットランド最大の産業分野に育て上げたような重要な役割も果たした[47]。19世紀初頭まではこれらの製品は国内市場を含め，実に多くの地域や国へ輸出されていた[48]。地理的に，スコットランドに近いヨーロッパ大陸の国々，そして植民地貿易で密接な経済関係を持ってきた北アメリカと中南米植民地，さらに綿布の原産国であったインドにおいてもスコットランドの良質綿布はそれなりの販路を持っていた。こうして北海，大西洋，そしてインド洋を越え，スコットランド製の

44) ロバートスン，前掲論文，82ページ。
45) 同上論文，84ページ。
46) Hamilton, *op. cit.*, p. 141.
47) Marwick, *op. cit.*, p. 214.
48) Hamilton, *op. cit.*, p. 147. ロバートスン，前掲論文，83ページ。スコットランド綿製品の販路構成に関しては，ハミルトンとロバートスン両氏は違う見解をもっている。即ち，ハミルトンはスコットランド綿製品の多くが海外に輸出されていたと主張しているのに対して，ロバートスンはブリテン島がスコットランド綿製品の主要な市場であると強調している。

綿布がほぼ世界中に輸出されていった。綿製品の輸出を通じて，スコットランドが本格的に世界市場に編入されるようになったことが特に当該経済地域の形成にとって重要な意味を持つことである。

ところで，1810年代に入ると先に見たようにヨーロッパ大陸諸国の綿工業の勃興やナポレオンの大陸封鎖令の施行によって，ヨーロッパ大陸での販路が次第に縮小していった。そして，北アメリカの綿工業は中南米植民地でのスコットランド綿製品の販路を逼迫するまでに成長してきていた[49]。海外の市況が日々厳しさを増す中で，国内市場，特に所得水準が比較的に高いイングランドの方がスコットランド綿工業の存続にとってますます重要な意味を持つようになった。国内市場を確保し，かつ新しい海外市場を開拓するに当たって，スコットランドの綿布製造業者は1830年代から次々と大衆向けの綿製品を発売し，幅の広い製品戦略を展開していた。イングランド，そしてスコットランド内部ではその戦略がある程度の効果をあげることができた一方，イギリス最大の植民地――東インドでも1810年代以後の市場開放のため新しい販路を獲得するに至った。19世紀後半にはスコットランド綿製品の販路はこのようにほとんどブリテンの支配下にある地域に集中するようになった。

紡績工程の製品であり，綿布の原料になる綿糸の市場動向もスコットランド綿工業の発展にとって重要な意味を持つ商品であった。域外に大きな販路を持つ綿布とは違って，19世紀初頭まではスコットランド内部で必要とされていた綿糸，特に高番手細糸の供給がほとんどイングランドに依存する状態にあった[50]。域内の旺盛な綿糸需要を満たすために，スコットランド地元の綿布関係業者やイングランドの綿糸商人・製造業者たちが次々と紡績工場を建設し，綿糸の生産高が年々増大していったことが前述した通りである。19世紀初頭までのスコットランドの綿工業はある意味では，織布生産の規模拡大に牽引される

49)　Hamilton, *op. cit.*, p. 148.

50)　チャップマン，前掲書，86ページ，ペイズリィの高級綿布の原料である高番手細糸がほとんどマンチェスターから調達してきたものであった。

形で紡績生産の活況が齎されたような「織布先導型」の発展様式を示したことができる。

しかし，19世紀に入るとこのような「織布先導型」の発展様式には次第に変化が生じた。紡績工程の機械化が進み，生産能力が大いに拡大した結果，スコットランドは綿糸の供給がイングランドから独立しただけでなく，ヨーロッパ大陸まで綿糸を輸出する能力さえ持つようになったのである[51]。1830年代以後は良質綿布の販売不振とは対照的に，綿糸の販売が域内の大衆向け綿布の生産拡大と域外市場からの需要に支えられ，堅調な実績を上げつづけた。紡績生産の好調は19世紀後半のスコットランド綿工業の発展にとって特に重要な意味を持っていた。良質綿布の販売不振に起因する綿工業全体の停滞傾向が綿糸の販売拡大によってある程度緩和され，しかも安価な綿糸を域内から調達できるようになったため，綿布，特に大衆向け綿布の価格競争力とその販路がある程度確保できたからである。スコットランドの綿工業はこのように前半期が織布生産，後半期が紡績生産によって先導される形で約100年間の発展過程を進めてきたことができよう。

III スコットランド綿工業の特徴とその歴史的役割

1 スコットランド綿工業の特徴

以上，スコットランド綿工業の発展過程を概観した結果，その特徴について次のことが確認できるであろう。まず，亜麻布の生産・経営体制をそのまま受け継ぎ，スコットランドの綿工業は綿糸供給の一部をイングランドに求めながら，良質綿布の生産を中心に初期の発展過程を進めた。綿糸を供給するにあたって水力紡績工場，ジェニー，そしてミュール紡績場の建設がスコットランド全域で展開され，紡績生産も織布生産の規模拡大を追うようにして，その規模が年々増大していった。このように良質綿布の生産に特化したことによって，スコットランドの綿工業は発展初期の繁栄を成し遂げることができた。しかし，

51) Hamilton, *op. cit.*, p. 138.

良質綿布の生産に特化していたがゆえに，スコットランド綿工業の早期の衰退が免れないことになったといえる。それによって技術基盤が手工業に止まり，即ち機械生産の進行が進まなかったことが，後にスコットランド綿工業の発展を妨げる最大の隘路となったのである。特に良質綿布の製造が高度な手工技術によるところが大きいため，織布工程の機械化の進行が緩慢だったことは当然なことではあるが，紡績工程でさえ水力紡績工場より手作業が比較的に必要とされているジェニーや手動ミュール紡績場の方が数多く稼働していた[52]。19世紀中葉になってようやく自動ミュールや力織機の普及がスコットランドでも見られるようになったが，機械化の進行であれ，規模の拡大であれ，いずれもイングランドとは比較にならないものであった。綿工業全体の機械化の進行，従って工場制経営の普及の立ち遅れが結局，スコットランド綿製品の競争力の相対的な低下を招き[53]，綿工業の早期の衰退を惹起した最も重要な要因の一つになったのである。

一方，スコットランド綿工業の発展過程においてイングランドが多くの側面で重要な役割を果たしたことが注目に値する。まず，スコットランドでの綿紡績と織布活動の進行にとって，イングランド人資本とイングランド製の綿糸が欠かせない存在であったことが先見た通りである。また，1830年代スコットランドの製鉄・機械工業が勃興するまでには[54]，紡績機械や蒸気機関等々の機械類の供給をほとんどイングランドに依存していたことも事実である[55]。そして何よりも重要なのは，綿製品の販売に関してはイングランドとその支配下にある諸植民地がスコットランドの綿製品に大きな販路を提供した。一方，国内市場や海外市場ではスコットランドと最も激しい競争を展開した国もイングランドであった[56]。いずれにしても，資金，原料，生産設備，そして市場などの側

52) Hamilton, *op. cit.*, p. 129.
53) Farnie, *op. cit.*, p. 73.
54) 北政巳『近代スコットランド鉄道・海運業史—大英帝国の機械の都グラスゴウ—』御茶の水書房，1999年，13-15，21-22ページ。
55) Mitchell, *op. cit.*, p. 111.
56) G. Unwin, *Samuel Oldknow and the Arkwrights: The Industrial Revolution at Stockport* ↗

面においてスコットランドの綿工業はイングランド経済の動向に大きな影響を受けながら[57]，その発展過程を進めていったことをここで確認することができよう。

2 スコットランド綿工業の歴史的役割

まず，綿工業の発展と産業革命の勃発によって，約200年間スコットランドで進行していた本源的蓄積がようやく完成を迎え，スコットランドが本格的に資本制経済社会へ移行した。これは綿工業が果たした最も重要な歴史的役割である。この後にスコットランドの綿工業は不充分な機械化を原因に19世紀中葉から次第に衰退を余儀なくされたが，その発展期間中に産業連関効果を通じて多くの産業分野の発展が促進されたことは，重要な意味を持っている。特に亜麻と羊毛工業は，綿工業の機械化の波及効果を受け，生産性が一段と向上しただけでなく，綿工業との間に資本や労働力の交流も盛んに行われていた。そして，後に産業革命の基幹産業の一つでもあった製鉄業と機械工業は，紡績や織布機械等々の生産を通じて近代的成長を成し遂げた。これら産業の資本の多くは綿工業から流入してきたものでもあった。このような亜麻，羊毛，製鉄，機械工業の例が示すように，綿工業の発展によって実に多くの産業分野の近代的成長が促され，その過程において資本制生産をとった社会的分業体制が確実にスコットランド内部で形成された。200年間も続いた本源的蓄積を基盤にし，綿工業を足がかりに域内の多くの産業分野を近代化させた「スコットランド産

---

and Marple, Manchester, 1924, (Mark Casson, ed., *Entrepreneurship and the Industrial Revolution*, Vol. IV, Routledge/Thoemmes Press, 1996) pp. 59, 98. T. M. Devine, *The Scottish Nation 1700-2000*, Penguin Books, 1999, p. 250.

57) スコットランドで進行していた産業革命とイングランドのそれとの関係についていままで発表した諸見解に関しては，下記の諸著作を参照されたい。Marwick, *op. cit.*, p. 207. 天川潤次郎「デフォー研究」未来社，1966年，188-191ページ。北政巳「スコットランドとイギリス産業革命」（角山栄編『講座西洋経済史Ⅱ 産業革命の時代』同文館，1979年，253-267ページ。菊池紘一「スコットランド近代化を見る眼」（鈴木健夫・南部宣行・川勝平太・原剛・菊池紘一・松本康正著『「最初の工業国家」を見る眼』早稲田大学出版部，1988年）83-100ページ。C. A. Whatley, *The Industrial Revolution in Scotland*, Cambridge University Press, 1997, pp. 1-8. T. M. Devine, *The Scottish Nation 1700-2000*, Penguin Books, 1999, pp. 17-30.

業革命」は，この意味で「イギリス産業革命」ないし「イングランド産業革命」とは相対的に独立した一歴史過程として見なすことができよう。言うまでもなく，このような「スコットランド産業革命」によって形成してきた資本制経済地域は自立性の強いものであり，従って「スコットランド原経済圏」として理解しても差し支えないであろう。最後に「スコットランド原経済圏」とイングランドもしくはブリテン全体との関係を一瞥し，結びに代えたい。

3 「スコットランド原経済圏」の位置付け

綿工業の発展による「スコットランド産業革命」の進行は，スコットランドが確かに資本制社会としての経済基盤―「原経済圏」を築き上げるに至った。しかし，先見たようにこの経済地域は同時にイングランドと相互依存関係によって成り立ったものでもある。綿工業の発展過程から見られるように，資金，生産設備，原料の調達においてスコットランドとイングランドとの間に一種の分業関係を形成し，国内市場と海外市場での両地域の競争がさらにそれぞれの綿工業の発展路線を規定する重要な要因の一つであった。このことから，スコットランドが「原経済圏」としての経済基盤を持ち，その枠組みのもとで自立した経済活動を行っていくことができたのは，あくまでもイングランドとの分業関係があってこそのことだと考えられる。スコットランドとイングランドとの間のこのような分業関係がどれほどアイルランドとウェールズに存在しているかに関してはなお詳細な実証研究が必要であるが，ここで少なくとも次のことが考えられよう。即ち，これらの地域の間の相互依存関係こそ，それぞれの独自性を存続させてきた最も重要な経済根拠であると同時に，「グレート・ブリテン」という政治的枠組みが大きな崩壊を見せず現在まで維持しえてきたことの経済背景もそこにあるといえよう。